

島崎前原子力規制委員会委員長代理との面会の概要について

平成28年6月20日
原子力規制庁

1. 面会の趣旨

島崎前委員長代理が地震動評価手法の問題点を指摘されている旨の新聞報道等があり、その内容が島崎前委員長代理在任中に行われた審査に関するものであったことを踏まえ、事実関係を確認するため、田中委員長と石渡委員が島崎前委員長代理から直接話をお聞きした。

2. 面会における主なやり取り

(島崎) 将来の地震を予測する場合は、地震前に、断層の長さ、面積、地震モーメントを測定、断層のずれの量を考える必要があるが、関係式は地震後にわかった量で作られている。そこから、不確定性というか、推定の誤りが出てくる。

(島崎) 断層面が垂直の場合は地震モーメントが、入倉・三宅式を1とすると、山中・島崎式は3.5倍、武村式は4倍になる。

(島崎) 熊本地震に係る国土地理院の暫定的な解で計算した断層面積を、入倉・三宅式に入れると、地震モーメントと断層のずれの量が、実際の値に比べ非常に小さくなる。入倉・三宅式で実際の値になるような断層長さを求めると、57kmになるが、実際は30km、35kmと言われている。地震前に57kmと言う人はいない。すなわち、入倉・三宅式を使う限り、震源の大きさは過小評価される。

(島崎) 大飯で評価している断層は垂直で、入倉・三宅式を使っている。より真実に近そうな、過小評価にならないような式を使って、これまでと同じように計算し、必要であれば色々な判断をするのが一番ではないか。まずそこがスタートである。

(島崎) 垂直になっている断層に入倉・三宅式を使うことが既成事実化すること、これ以上見直すつもりはないという後ろ向きになってしまうことが一番怖い。必ず前向きに新しいものを受け入れるという方向で進めていただきたい。

(島崎) 川内は、すぐにどうこうという問題ではなさそうに見える。

(島崎) 高浜は遠いから、そんなに影響はないであろう。

(委員長) 今後、新知見については、それなりに評価されたものをベースにして、我々なりの判断を入れながら取り入れて行きたい。